今帰仁村文化財調查報告書第11集

史跡今帰仁城跡

一俗称本丸発掘調查概報一

1985年3月

沖縄県今帰仁村教育委員会

今帰仁城跡俗称本丸発掘調査概報

はじめに

俗称本丸の発掘調査は第4次(1982年)、第6次(1983年)、第7次(1984年) にわたって実施された。第8次(1985年)で俗称本丸の発掘調査は終了する予定である。 なお、第5次(1983年)は俗称大隅の発掘調査を実施した。ここでは、第4・6・7次 発掘調査で得た成果の概略を述べる。

層 序

俗称本丸は平坦面のほとんどない石山に土留め石積み、版築等の造成工事によって平場 を造っている。よって、層序もかなり複雑になっている。

第 I 層 (暗褐色土で層厚約20㎝)

最も新しいと考えられる礎石建物に対応する層で、16~17世紀の遺物が多く検出された。

第 II 層 (黒色土で層厚約20~50 cm)

明染付(青花)が非常に少ない層で、14世紀後半~15世紀前半の青磁が多い。

第Ⅲ層 (版築)

最後の版築で、角礫を $20\sim30$ cm敷いて、その上に $5\sim10$ cmの赤褐色土を敷いた版築である。遺物はほとんど混入していない。

第Ⅳ層 (版築)

第Ⅲ層と同じく、角礫を20~30㎝敷いて、その上に5~10㎝の赤褐色土を敷いた版築である。この版築の上には、東側石垣沿いに石積み遺構が検出されたので第Ⅲ層とは区別した。遺物はほとんど見られない。

第 V 層 (黒褐色土で10~15 cm)

翼廊付き基壇建物直下の遺物包含層である。14世紀前半の中国陶磁器とアラスジケマンガイ・魚骨などが多く検出される層である。

第Ⅵ層 (版築)

黄褐色土を2~5cmの厚さで敷いた版築である。遺物は見られない。

第Ⅵ層 (淡黒褐色土で層厚 2~50㎝)

最初の版築直上の層で、東側では城壁(石垣)の下へ延びている。東側城壁以前の層で、遺物は14世紀前半の中国陶磁器が検出された。

第Ⅷ層 (版築)

赤褐色土や黄褐色土を 3 ~ 5 cmの厚さで、10数回打ち固めて版築した層で、厚い所は 1 m以上もある。この版築は土留め石積みを廻らしてから行なわれている。遺物はほとんど見られない。

第1X層 (黒色土で層厚が10~30㎝)

最初の版築以前の層で、俗称本丸で最も古い遺物包含層である。13世紀末~14世紀初の中国陶磁器、土器、マガキガイなどが検出された。

遺構

(1) 築城の方法や順序

- ① 尖った石山をある程度削平し、その周囲に土留め石積みを廻らす。
- ② 土留め石積み内を赤褐色土や黄褐色土で版築をして平坦にする。
- ③ 版築の上に掘建柱の建物が建てられる。
- ④ 土留め石積みの外側に城壁(石垣)が積み上げられる。
- ⑤ 城壁内に翼廊付き基壇建物が建てられる。(現存する基壇の高さは約90㎝)
- ⑥ 角礫と赤褐色土による雑な版築を2度行なって城壁内全体を平坦にする。そのとき 基壇は埋められるが、それでも基壇が高かったので、基壇の上部(礎石も含めて) を削平している。
- ⑦ 平坦に造成された上に基壇のない礎石建物が建てられる。

(2) 掘建柱建物

(3) 翼廊付き基壇建物

城壁(石垣)を積み上げてからの建物で、最も見映えのする本格的な建物であったと

考えられる。4間×5間の建物で、東と西に翼廊が延びている。基壇は石積みで、現存する高さが約90㎝ある。翼廊部分は一段下がっている。基壇の外側には小さな礎石が並んでいることから、回廊が廻っていたと考えられる。なお、基壇上の礎石は最後の造成のときに除去されたと考えられる。建物の本体部分は約10.30 m×約13.80 mである。

(4) 基壇のない礎石建物

最も新しい建物で、5間(12.21 m)×8間(19.536 m)の大きな建物である。礎石は16世紀の層の上に乗っている。建物の東側には雨落ちの縁石が一部残っている。

(5) 石門

南側城壁で石門が検出された。これは古い城門で、礎石建物の頃に閉塞されたようである。発掘によってPL. 3のように検出された。間口約2m、奥行(石垣幅)約4.5m、高さ約2.7mである。床面は径20~30mの平板石を敷き詰めている。

(6) 石段

俗称本丸へのぽる階段(石段)が検出された。古い石段の上に新しい石段が重なっている。

遺物

① 青磁

第2号土壙から碗6点と口折蓮弁文皿1点が検出された。完形品を意識的に埋めたものである。第Ⅶ・Ⅸ層などでは刻花文碗など古いのが検出された。全体的には碗・皿類が多いが、酒会壷、大型花瓶、大型器台、盤などの大型品も目立つ。

② 白 磁

ビロースクタイプの白磁碗や口禿皿などが第V・VIIなどで検出された。第I層では燈明皿として使用された平底皿が多く検出された。

③ 元様式青花

壷を中心に多くの破片が検出された。第Ⅰ・Ⅱ層からの出土で、古い層からは検出されなかった。白抜き龍文壷などの優秀品なども見られる。

④ 明染付

碗・皿・杯・瓶などの器種が見られる。15世紀のものは少なく 16世紀のものが多い。

なお、第 I 層では17世紀のものも多く検出された。

⑤ 黒釉陶磁

いわゆる天目釉の焼物で、天目茶碗が多く検出された。茶入れも数点検出された。

⑥ 褐釉陶器

四耳壷が主体である。口縁部が玉縁状のものと方形状のものが見られる。

⑦ その他の中国陶磁

緑釉、三彩、翡翠釉、瑠離釉、赤絵などが検出されている。

⑧ 高麗青磁

碗、角杯などがわずかに検出された。

⑨ 備前焼

擂鉢が数点検出された。

⑩ ベトナム陶磁

いわゆる安南陶磁で、染付壷、青磁碗などが検出された。

⑪ タイ陶磁

タイのサワンカローク窯の合子がかなり検出された。

12) 銭 貨

中国古銭が多く検出された。なお、第 I 層で、「仙台通宝」(鉄銭)が 2 枚検出された。

13 銅製品

鞐、覆輪、切羽など甲冑や刀などの武具の付属品が多い。

(4) 鉄製品

刀、刀子、鉄鏃、鉄釘、槍鉋、鉄鉗、鉄滓などが検出された。槍鉋は完形品で保存良好な好資料である。鉄鉗は鍛冶道具であり、鉄滓とあわせて考えると、近くに鍛冶場があった可能性がある。

なお、刀、槍鉋、鉄鉗、鉄滓は第Ⅰ・Ⅱ層の出土。

15 骨製品

骨鏃が数点検出された。柳葉型の骨鏃で、柳葉型の鉄鏃に類似する。このような骨鏃は勝連城跡からも検出されているが、その用途については今後検討したい。第Ⅱ層の出土。骨鏃のほかにサイコロが2点検出された。サイコロは勝連城跡でも検出されている。

16 貝製品

ヤコウガイ製の貝匙が1点検出された。把手部分に彫刻のある小型貝匙である。第 **I** 層出土。

⑰ 石 器

砥石、提砥、石臼などが検出された。石臼は新安から検出されているような茶臼の破片と考えられる。提砥は「今帰仁城跡発掘調査報告 I 」(1983)で短冊型護符と報告したものであるが、坪井清足氏の御教示があり、提砥と改称する。

おわりに

俗称本丸の築城方法(順序)や築城年代などが層序的に把握されたことは大きな成果である。平坦面のほとんどない石山に想像を絶するような土木工事が行なわれていたことが解明された。土留め石積み、版築、翼廊付き基壇建物など遺構の多くが沖縄ではじめての解明であり、グスク研究に大きく寄与するものと考える。

俗称本丸は13世紀末~17世紀前半まで使用されていたことが解明され、城内で最も長期間にわたって使用された郭と考えられる。ちなみに、「今帰仁城跡発掘調査報告 I J(1983)で報告した俗称志慶真門は、13世紀末~14世紀初頭の遺物包含層もなければ、17世紀の遺物も検出されなかった。

俗称本丸の発掘調査は第8次発掘調査(1985年)が残っており、それが終了後にまとめて報告書を出す予定である。

金 武 正 紀 (沖縄県教育庁文化課主任専門員) 松 田 朝 雄 (今帰仁村教育委員会文化財係長) 宮 里 末 廣 (" " 非 常 勤)





 P L. 1
 上: 翼廊付き基壇建物 (南から)

 下: " (南東から)





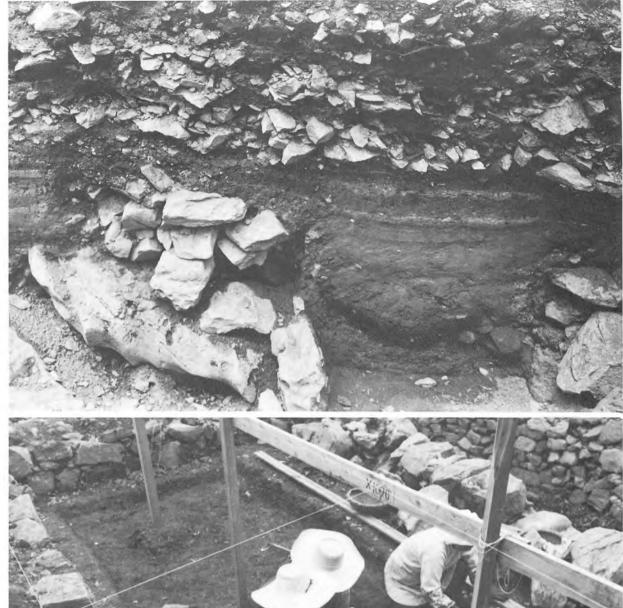
PL. 2 上: 翼廊付き基壇建物 (西から)

下: 翼廊付き基壇建物より下層の掘建柱 (南から)





PL. 3 上:南側城壁で検出された石門 (南から) 下:俗称本丸への石段 (西から)





PL。4 上:版築と土留め石積み (北から)

下:発掘状況 (北から)



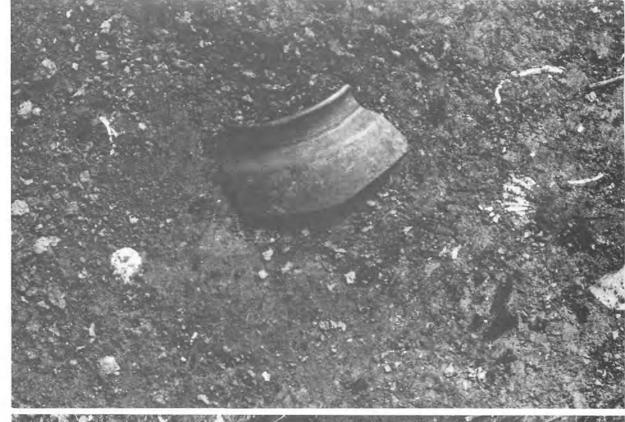


PL. 5 上:第2号土壙で検出された青磁碗・皿 下:第3号土壙で検出された陶磁器





PL. 6 上:第13号土壙で検出された明染付碗 下:第V層で検出された青磁無鎬蓮弁文碗





PL. 7 上:第V層で検出された黒釉壷 下:第I層で検出された刀

今帰仁村文化財調查報告書第11集

史跡 今 帰 仁 城 跡

俗称本丸発掘調查概報

発 行 1985年3月30日 沖縄県今帰仁村教育委員会 沖縄県今帰仁村字仲宗根232 TEL 098056-2647

印刷 1985年3月26日 文 進 印刷 株 式 会 社 那 覇 市 上 間 567 TEL 0988-55-2323(代)